



## 第1回欧州政策パネル

# 「欧州議会選挙後の欧州の行方：デモクラシーの底力」メモ

2019年7月24日

グローバル・フォーラム

このほどグローバル・フォーラムは、欧州についての最新かつ正確な情報を収集・分析し、その成果を随時提言・発信する機会として「欧州政策パネル」を始動した。しかるところ、その第1回目の「欧州政策パネル」を、グローバル・ガバナンス学会の後援により、下記1.～3.の日時、場所、出席者にて開催したところ、その主な議論概要は、下記4.のとおり。



1. 日 時：2019 年 7 月 24 日（水） 17 時～19 時まで
2. 場 所：明治記念会館「丹頂の間」
3. テーマ：欧州議会選挙後の欧州の行方：デモクラシーの底力
3. 出席者：95 名（以下のパネリストを含む）

### 【パネリスト：7 名】

|       |                          |
|-------|--------------------------|
| 渡辺 繭  | グローバル・フォーラム執行世話人         |
| 飯村 豊  | 元駐フランス大使                 |
| 渡邊 啓貴 | グローバル・フォーラム有識者世話人／帝京大学教授 |
| 伊藤さゆり | ニッセイ基礎研究所研究理事            |
| 田中 素香 | 東北大学名誉教授                 |
| 伊藤 武  | 東京大学教授                   |
| 福田 耕治 | 早稲田大学教授                  |

（プログラム登場順）

### 4. 議論概要

「欧州政策パネル」は、高畑常任世話人の司会進行により、オープニング・セッション、メインセッションの順で開催されたところ、その主な議論概要については、次のとおりであった。その後、参加者全員で活発な意見交換が行われた。

### (1) 渡邊繭グローバル・フォーラム執行世話人による「開幕挨拶」

※この「開幕挨拶」の全文は[別添](#)を参照のこと。

現在、国際社会は百年に一度あるかないかのパワートランジションの影響下にあるが、当フォーラムは、そのメガトレンドを捉える上でも重要な欧州に着目し、その最新かつ正確な情報を収集・分析し、その成果を随時提言・発信する機会として、このたび「欧州政策パネル」を始動させた。欧州は、近代以降つねに時代の先進性を担保する地域であった。昨今の欧州政治には、ポピュリズムに代表される「民主主義の代償」などの懸念材料があるなか、それに抗する多元化の動きあるいは欧州統合のさらなる深化の機運もみられる。この「政策パネル」をつうじて、そうした欧州地域の動向をつぶさに捉え、日本の欧州理解がいつそう深まることに期待したい。



### (2) 飯村豊元駐フランス大使による「来賓挨拶」



ヨーロッパは、政治、経済、環境、ガバナンス、国際規範作りなどの分野で国際的に主導的役割を果たしており、また自由で開かれた国際秩序を維持するために日欧協力が極めて重要になりつつある。そうしたなか、ヨーロッパ理解を深めることは必須だ。現在の欧州を考える上で、フランスのド・ゴールの思想を想起したい。ド・ゴールは、欧州の連邦化に反対し「祖国からなる欧州」の重要性を主張していた。また早い段階から独仏和解に正面から取り組み、そこに欧州統合の基礎を見出していたそして英国の EC 加盟をあくまでも拒否した。現在のブレグジットをド・ゴールはどう思っただろうか。現在のヨーロッパは、ド・ゴールが懸念した「統合の拡大と深化」の反動とみられるさまざまな現象、ロシアの復讐心、移民の急速な拡大への恐怖、民族主義的ポピュリズム、そして何よりもブレグジットに直面している。そして、ヨーロッパは民主的価値を守りつつも、ヨーロッパの諸民族が真に望む統合の在り方を求めていくという歴史的な使命に向き合おうとしている。

### (3) 渡邊啓貴帝京大学教授による「基調講演」

本年5月の欧州議会選挙にはいくつかの注目すべき特徴がみられた。第一に、反 EU ポピュリスト勢力が予想ほど伸びず、その議席数が微増にとどまったこと、第二に、これまで40年間過半数の議席を有してきた親 EU 派の「欧州人民党」と「社会民主進歩同盟」の二大既成勢力が後退し、議席の過半数を失ったこと、第三に、環境保護派と中道欧州統合派が勢力を大きく伸ばしたこと、第四に、投票率が1994年以来久しぶりに過半数を超えて、約51%を記録したこと、第五に、左派ポピュリストである「不服従のフランス」(仏)、「シリザ」(希)、「ポデモス」(西)などが後退したことである。全体としてみると、既成政党の退潮と、それに代わ



る政治勢力の分散化・多党化(政治勢力再編)が進んだが、それは前回の選挙から見られた傾向である。さらに投票率が上昇したことも踏まえると、今回の選挙が示したのは、欧州議会の認知度が向上し、統合に対する関心が高まったという意味で「EU デモクラシー」の深化の兆候であったといえる。欧州統合とは「挑戦(チャレンジ)」である。したがって厚い壁にぶつかることも多いが、その克服のための試行錯誤が統合プロセスである。欧州統合とは、共有する問題解決のための「国境を越えたリストラ(制度再編)」であり、それこそ統合のリアリズムの側面である。欧州統合を単純な理想主義と決めつけて、安易な危機説や統合終焉論に流れては欧州統合の真実を見逃すことになる。良識ある研究を基礎とした長期的視野からの冷静な議論が必要であろう。

### (3) 伊藤さゆりニッセイ基礎研究所研究理事による「報告」



英国が、期限通りの EU 離脱に失敗した末に実施された欧州議会選挙では、3年間の政治の迷走への有権者の憤りがはっきりと示された。与党保守党は惨敗、最大野党・労働党も伸び悩み議席は半減した。ブレグジットを巡る世論の分断も浮き彫りになった。最多の 29 議席を獲得したのは「合意なき離脱」を掲げた離脱党だった。メイ首相は、国民投票の結果を引き継いで、残留派と離脱派が歩み寄れる「折衷案」をまとめたが、英国内での支持は広がらず、却って分断を深めてしまったようだ。ジョンソン新首相が公約通りに「合意なき離脱」へと突き進めるのか、

突き進むのかは不透明だ。現在の期限である 10 月 31 日に「合意あり離脱」するにせよ、「合意なき離脱」するにせよ、それが「終着点」ではない。EU との協議は続き、さらに、アイルランド統一、スコットランド独立の是非を問う住民投票という次のステージに進むことになるかもしれない。離脱期限を再延期し、国民投票の再実施の是非を問う総選挙を経て、離脱撤回へと進んだ場合も、英国内の分断は解消しない。EU のゲートウェイとしての信頼を取り戻すことはできそうにない。

### (3) 田中素香東北大学名誉教授による報告

2019 年 5 月の欧州議会選挙は、イタリアの連立政権などポピュリズム運動の上昇機運とみられる中で実施された。結果は、親 EU4 グループで 513 議席、解散前と比較してマイナス 10 にすぎない。EU の景気状況が比較的よかったので、ポピュリスト政党への投票が抑えられた可能性もあり、楽観は禁物だろう。英国では、EU 残留を唱えた自由民主党が伸び、離脱方針の曖昧な労働党、保守党が激減した。Brexit が実現すれば、Brexit 党のほか、従来 EU 懐疑派の支柱だった英保守党の議員もいなくなるので、広義の EU 懐疑派の影響力は低下する可能性もある。ドイツでは、得票率では中道の 2 大政党が激減、過半数割れした一方、Green が大躍進した。ドイツでは戦後の 2 大政党制が崩壊し、多党化が顕著である。



中・東欧では多くの国は中道右派・中道左派・リベラルの 3 党のみか、それに EU 懐疑派の ECR が加わる構造であり、EU17 と比較すると、多党化は進んでいない。「反 EU」のハンガリー、ポーランドの政府与党は報道の自由を規制し、反 EU キャンペーンを展開するが、首都圏・大都市ではその批判政党の方が支持率は高くなっていて、経済発展により都市化がさらに進めば、民主主義化、EU 支持率の上昇を展望できよう。



#### (4) 伊藤武東京大学教授による報告



イタリアでは6月に反既成勢力政党「5つ星運動」と右派「同盟」の連立によるポピュリスト政権が成立した。欧州議会選挙および同時に行われる地方選挙は、イタリアにおいてその地位が全国的に承認されるかどうかのみならず、欧州議会や加盟国でポピュリスト勢力の躍進が続くかどうかを占う試金石と考えられた。選挙結果は、急進右派の「同盟」が予測を上回り得票率34%超と躍進した一方、連立パートナーの「5つ星運動」は勝敗ラインの20%を割り込んで17%台へと低落し、22%を超えた野党「民主党」に第2党の地位を奪われた。現

状、急進右派の「同盟」が、強硬な移民政策を梃子に支持を集め、社会の分断を深める傾向に変化は見られない。ただし、「5つ星運動」の勢力が低下したことで、「同盟」を除いた勢力による連立形成は数字上可能になっており、ポピュリスト連合の基盤は不安定化している。イタリアのデモクラシーの行方は予断を許さず、「同盟」など急進右派、「民主党」など中道左派、「5つ星運動」の3勢力鼎立状況が続いている。

#### (5) 福田耕治早稲田大学教授による報告

EUは、欧州レベルで国境を越えた民主主義を実現するための社会実験の場である。リスボン条約に基づくEUの民主的正統性の根拠は、加盟国と欧州市民にある。故に、欧州ガバナンスにおいては、EUレベルの諸機関と加盟国レベルの統治機構の両レベルの「混成システム」としてEUは機能しており、これに加えて加盟国を単位とする民主主義と、欧州市民（個人）を単位とする民主主義という意味でも「二重の民主主義」、「二重のアカウンタビリティ」の確保が要請されている。その点で、EUの民主主義を担保し立法過程を監視する役割として、EU諸国民の民意を直接反映する唯一の機関としての欧州議会は、各国議会の存在とともに、非常に重要な機関である。欧州議会に着目すると、先の欧州議会選挙を踏まえ、欧州統合の方向性に大きな変化はないだろうが、フランス、イタリア、ポーランドなど大国で極右政党が第1党となった事実は重く、欧州懐疑派の伸長は否定できない。また、欧州議会では親EU派政党も複数林立しており、親EU派政党間であっても調整の難しさが目立ち始めた。EUには多くの不安定要素があり、EU改革の課題は多い。



(文責在 GFJ 事務局)